

宋代における祠廟信仰に関する研究の現状と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 公開日: 2019-04-16 キーワード (Ja): 多地域的祠廟信仰, 史料, ケーススタディ, 福建地域社会 キーワード (En): Multiregional Temple Worship, Historical Materials, Case Study, Fujian Area 作成者: 王, 燕萍 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20200416-007

Title	宋代における祠廟信仰に関する研究の現状と課題
Author	王, 燕萍
Citation	人文研究. 71 巻, p.53-68.
Issue Date	2020-03-31
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	進藤雄三教授：関茂樹教授：塚田孝教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

宋代における祠廟信仰に関する研究の現状と課題

王 燕 萍

宋代の民間信仰研究では、「民間信仰」、「民間宗教」、「祠廟信仰」、「民衆祠神信仰」などの用語が混在しているが、「民衆祠神信仰」の定義に即した場合、宋代人の認識を反映する「祠廟信仰」を使うべきであろう。一般の「祠廟信仰」は発生地に限られて信仰されるが、宋代になって、発生地を越えて他の地域、さらに全国にまで信仰を集める「多地域的祠廟信仰」が次第に現れてゆく。

これまで宋代における祠廟信仰に関する研究は、(1) 個別の祠廟信仰、とりわけ明清時期に「多地域的祠廟信仰」に演変してゆく祠廟信仰の源流を遡ること、(2) 祠廟信仰と国家の関係を探るため、祠廟に対する勅賜制度、正祠・淫祠の認定、祠廟信仰が地域社会に与える影響等の問題を考察すること、(3) 祭祀活動の実態、即ち祭祀儀式、組織などの問題を解明すること、という三つの方向で行われている。多地域的祠廟信仰に関する研究は伝播の媒介、伝播の方式、伝播の担い手、祠廟間の関係などの問題をめぐって進んでいる。

今後の課題としては、勅牒、廟記、祝文、地方志の史料としての性格と可能性を検討しながら、「多地域的祠廟信仰」の代表例である、清水祖師、保生大帝、媽祖信仰をケーススタディとして取り上げ、福建地域社会における「多地域的祠廟信仰」の形成と発展について総合的な研究を行う必要性を示している。

和文キーワード：多地域的祠廟信仰、史料、ケーススタディ、福建地域社会

伝統中国では、人々の生活は様々な信仰と結びついている。宋代においても、儒教を主とする国家祭祀（例えば、山川海瀆、社稷壇、風雨雷電、龍神、孔子崇拝など）、本国に形成された巫覡信仰、道教信仰、外国伝来の仏教、マニ教ないしは民衆によって作り出された様々な祠廟信仰（例えば、媽祖信仰、関帝信仰、梓潼信仰など）は、宋代人の日常生活と思想生活に浸透している。本稿は、伝統中国社会を読み解く鍵として祠廟信仰、とりわけ多地域的祠廟信仰に着目してゆく。

一、祠廟信仰、多地域的祠廟信仰の定義

1、祠廟信仰の定義

これまで学界では、地方の祠廟や神祠に祀られ、民衆から崇拝される神祇信仰を、どのように取り扱うか、どのように解釈するかについての論争が絶えることがなかった。異なる理解に基づき、「民間宗教」、「民俗宗教」、「民間信仰」、「大衆信仰」、「民生宗教」、「祠廟信仰」、「祠神信仰」、「folk religion」、「popular religion」、「diffused religion」、「local religion」など

の用語が使われてきた。その中で、「民間信仰」が最も使われているが、祠廟信仰、先賢先聖祠、巫覡信仰などの異なる信仰を混在して取り扱っている。本稿では「祠廟信仰」という概念を用いる。ただし、以下に述べるように、皮慶生による「民衆祠神信仰」の用語と定義は本分析においても適切であると考えている。

2008年に、皮慶生は「民衆祠神信仰」の用語を提唱し、その定義と特徴を次のように定めた。「民衆祠神信仰」とは、固定した祭祀場所、祭祀儀式、比較的に安定した信仰者を持つものであり、「非制度性」、「民衆性（開放性）」、「神異性」という三つの特徴を持つことが提示された。「非制度性」とは、仏教、道教のような伝統的宗教に対して、体系的な經典や、教義がなく、宗教人士、場所、祭祀活動も組織性がないことを示す。勿論、「民衆祠神信仰」では信仰の発展に伴い、伝説、靈驗事跡、祠廟の構造を紹介する編纂物が作成されるようになり、また祠廟の中で巫覡、廟祝、僧侶、道士、さらには一般民衆が祠廟の日常管理を担い、各種の祭祀儀式も整備されていくようになることもある。「民衆性（開放性）」とは、郊祀、社稷祭祀、風神祭祀のような朝廷、地方官が主事する定期的な祭祀活動に対して、民衆祠神を祀る祠廟が民衆に向けて開放され、本地ないしは外来を問わず民衆が祈祷と祭祀を行うことができるようになることを意味する。当然ながら、朝廷より廟額、封号を賜った祠廟は地方官によって祭祀や祠廟の重修が行われることもある。「神異性」とは、記念的祠廟、例えば先賢祠、先聖先師祠に対して、靈異伝説、靈驗事跡が伝わっており、民衆から信仰を集めて祈祷、進香などの活動が行われることを指す〔皮慶生 2008（第1章）〕。

この定義の有効性を認めたうえで、宋代人は実際に「民衆祠神信仰」をどのように認識していたであろうか。「祠神」は神祇を祭祀するという意味であるが、宋代人はどのような言葉で「民衆祠神信仰」を表現したであろうか。宋代以降の地方志には、「祠廟」、「神祠」などの部類を設け、宗教施設と宗教活動場所を記載している。そこで、地方志の部類の設定からこれらの問題を確認してみることにする。

『宋元方志叢刊』（全8冊、中華書局影印版、1990）に収録された29部の現存する宋代地方志の中で、部類の設定が整い、体裁が比較的に完備されたものを見ると、「祠廟」、「祠堂」、「寺觀」の部類が設けられている。例えば、『（寶祐）仙溪志』巻三の「祠廟」類には、城隍廟、仙水靈惠廟、靈顯祠、靈惠袁侯廟、興福廟、三妃廟、東嶽行祠、昭靈顯佑真君行祠、順濟行祠、慈濟冲応真人行祠が記載されており、「祠堂」類には、蔡忠惠公祠、陳郡王祠堂、葉正簡公祠、林萍齋先生祠などの先賢祠が記載されている。また、『（淳熙）三山志』巻三十三～三十八の「寺觀類」には、寺院、道觀が記載されている。『（嘉定）鎮江志』巻七の「宮室・祠廟」類には、明応英濟公祠、故相文簡向敏中祠、三賢祠、武烈帝廟、徐偃王廟、英靈普護聖惠泰江王廟などの先賢祠と神祇の祠廟が記載されており、巻八の「僧寺・寺院」類と巻九の「道院・觀院」類には、寺院、道觀が記載されている。この3部の地方志からは、寺院、宮觀がはっきりとは祠廟と分別されていること、「祠廟」類の中に先賢祠が位置づけられ、「民衆祠神信仰」と言わ

れる神祠とは一括されることも少なくないことが分かる。

このことは、咸淳年間（1265-1274）に完成し、より詳しく部類を設定している、南宋の都城である臨安府の府志『（咸淳）臨安志』からも確認できる。

『（咸淳）臨安志』卷三「行在所録・郊廟」には、明堂、太廟、景靈宮、太社太稷壇、海神壇などの国家祭祀場所が記載されている。卷十三「行在所録・宮觀・祠廟・苑囿」には、朝廷に属する道觀と祠廟が記載されている。卷七十一「志・祠祀一」には、土神、山川諸祠が分類され、城隍廟、呉越錢武肅王廟、順濟廟、順濟龍王廟、水仙王廟などが記載されている。卷七十二「志・祠祀二」には、節義、仕賢、寓賢が分類され、旌忠廟、顕応廟などの先賢祠および生前の忠義、死後顕霊した官儒類神祠が記録されている。卷七十三「志・祠祀三」には、古神祠、土俗諸祠、東京旧祠、外郡行祠が分類され、臨安府治に所在する祠廟が記載されている。その中で、「古神祠」は大禹祠、周赧王廟、漢蕭相国祠、曹王廟などの漢以前の偉人を祀る祠廟を指しており、「土俗諸祠」には顕応廟、金華將軍廟、清元真君義勇武安王廟、白龍王廟、黒龍王廟が記録されている。「東京旧祠」とは、東京開封の祠廟が臨安で再建された恵応廟（皮場廟）、二郎祠を指している。「外郡行祠」は臨安府以外に本廟のある、臨安府に伝来した神祠を指しており、東嶽廟、広恵廟（祠山廟）、仰山二王廟、顕佑廟、順濟聖妃廟（莆田媽祖）、広靈廟、靈順廟（婺源五顕神）、梓潼帝君廟などの神祠が記述されている。卷七十四「志・祠祀四」には、臨安府所属の諸県の祠廟が記載されている。卷七十五～八十五「志・寺觀」には、臨安府所在の寺院、道觀が記載されている。

概して言えば、『（咸淳）臨安志』の記載は国家祭祀の場所（朝廷に属する宮觀、祠廟を含む）、祠祀、寺觀の三つの大類に分けられる。その中で、「祠祀」の序に示されているように、祠祀は「土域山海湖江之神」、「先賢往哲有徳之祭」、「御災捍患、以死勤事之族」を祭祀の対象とする神祠である。つまり、「祠祀」は先賢祠、地域に功德を与える自然神と人格神を祀る祠廟を含んでいる。

皮慶生が提示した「民衆祠神信仰」は先賢祠を除く「祠祀」である。先賢祠は生前の徳行のよい、功績の高い者を記念するために、学校、寺院、道觀などの祭祀場所に設けられることが多い。被祭祀者は神格がなく、靈驗を現さないものである。明清時期になると、先賢祠は名宦祠、郷賢祠、郷宦祠に変化してゆく。先賢祠に祀られるものは後に靈驗を現して神格化されることもあるが、神格化された先賢を祀る祠廟は記念的な先賢祠ではなくなり、神祠に変化する。これが先賢祠と「民衆祠神信仰」の相違点となる。

上に述べたように、宋代人の認識では、先賢祠と「民衆祠神信仰」はまだはっきりと区別されていない。史料では「祠廟」、「神祠」、「祠祀」などの用語で「民衆祠神信仰」を表現しているため、本稿では「祠廟信仰」の用語を使うこととする。「祠廟信仰」で祀られる神祇は「土域山海湖江之神」、「御災捍患、以死勤事之族」の神、即ち地方を護って恩徳を与えてくれる自然神、人格神である。

2、多地域的祠廟信仰の定義

次に、多地域の祠廟信仰について見てゆく。

祠廟信仰は、最初にある地方で形成され、信仰者も当地にとどまることが多い。祠廟信仰の及ぶ範囲は自然条件、行政管理、経済状況、文化発展などの要素によって制約される。宋代以前においては、祠廟信仰はほぼ発生地に限られ、ほかの地域に影響を与えることは極めて少なかった。

さらに、儒学思想体系における祭祀に関する理念では、政治秩序を護るために、天子、諸侯の祭祀権を区別し、「祭不越望」、「神不越境」の考えが基本であった〔李凱 2008〕。西周以降、この「三代命祀、祭不越望」の礼法制が崩れてしまったにもかかわらず、後世にも影響を与えた。

ところが、宋代に至ると、経済、政治、文化の発展によって人々の流動がより頻繁になり、祠廟信仰は発生地を越えて周辺地域、さらには全国にまで広がる可能性を有するようになった。そのため、宋代の史料からは外来の祠廟の繁栄を批判する文章、外来の神祇のために祠廟を立てる正当性を問う文章が出現するようになる〔皮慶生 2008（第3章）〕。

例えば、南宋の理学家陳淳は知州の趙寺丞に漳州の淫祀を批判する文章「上趙寺丞論淫祀劄」（陳淳『北溪大全集』卷四三）を上呈した。その中に「禮法、施於民則祀之、以死勤事則祀之、以勞定國則祀之、能御大災則祀之、能捍大患則祀之。及夫日月星辰、民所瞻仰、山林川谷丘陵、民所取財用、能出雲為風雨、見怪物、皆曰神。非此族也、不在祀典。今此邦之所崇奉者、大抵皆非此族。其無封號者、固無根原來歷。而有封號者、亦不過出於附會而貨取。何者而非淫祀？（中略）非所祭而祭之曰淫祀、淫祀無福、神其聰明正直、必不冒而享之。況其他所謂聖妃者、莆鬼也、於此邦乎何關？所謂廣利者、廣祠也、於此邦乎何與？假使有或憑依言語、亦妖由人興、不足崇信。人惟素行質諸鬼神而無愧、則雖不牲不牢而神福之、何事此妖邪之為乎？至於朝嶽一會、又將次第而起、復鄙俚可笑。嶽泰山、魯鎮也、惟魯邦之所得祭、而立祠於諸州、何謂？」と書いている。陳淳は、興化軍の聖妃（媽祖）、広州の広利王（南海神の祝融）、朝廷が各州に祠廟を立てるよう命じた東嶽泰山神を漳州に祀ることは礼法に背き、淫祀であると考えている。

南宋淳祐年間（1241～1252）、莆田県出身の李丑父は鎮江府の靈恵妃廟の廟記を執筆した。その廟記の中で、鎮江府に靈恵妃廟（媽祖）を立てる正当性を「御災患有功德於民、宜秩典祀、而地之相去則有疑焉？或曰：妃龍種也、龍之出入窈冥、無所不寓、神靈亦無所不至。今祠更諸爽塏、北瀕江淮、尚想風聲鶴唳於金山花鬘間、東望海門、猶記護三韓使節時事。妃既有功於此、亦宜食乎此。孟子之論、有一鄉一國之士、又有天下之士、烏可以地之相去為疑。金、焦之間、龍君水府所宮、妃之廟於此又宜。浙、閩、廣東南皆岸大海、風飄浪舶焉、依若其所天。」（『（至順）鎮江府志』卷八「神廟・祠廟」之「天妃廟」条）と説明している。水を統制する龍は天下の各地に所在し、祀られている。靈恵妃は龍種であり、至る所に存在している。従って、莆田県から遠く離れた鎮江府にも存在するはずであり、鎮江府で靈恵妃を祀ることは妥当であると

述べた。

上述したように、興化軍の聖妃（媽祖）、広州の広利王（南海神の祝融）、魯地の東嶽泰山神は発生地を越えてほかの地域に及んだ「多地域的祠廟信仰」である。

本地域にとどまる祠廟信仰は「土神」、「本地神」、「地方性祠神」、「本地域的祠廟信仰」などと呼ばれている。「多地域的祠廟信仰」は祠廟信仰の発生地を越えて他の地域へ広がっていくものである。一般的に言えば、「神不越境」の「境」は宋代にとって州府の境を指している。つまり、「本地域的祠廟信仰」は一州内で信仰されるのに対して、「多地域的祠廟信仰」は数州、さらに路を越えて、全国に及んだものと考えられる。勿論、行政区画は時期的に変わることがあり、文化的に結ばれた地域は行政区画に合致しない場合もあるので、「境」とは絶対に州府の境に拘るものではない。これは宋代の士人の考えから確認できる。

例えば、嘉定年間（1208～1224）、泉州永春県出身で知漳州に任じられた莊夏は漳州青礁慈濟宮の碑記を書き、保生大帝信仰の盛況を「通天下郡邑、必有英祠、表著方望、納民瞻依。然威德所被、遠不過一二州、近不越境。其烈而顯者、比比皆然。是惟忠顯英惠侯、宅於漳、泉之介、自紹興辛未距今垂七十年、不但是邦家有其象、而北逮莆陽、長樂、建、劍、南被汀、潮、以至二廣、舉知尊事。蓋必有昭晰於冥漠之間而不可致詰者矣。」（『（崇禎）海澄県志』巻十七「芸文志」の莊夏「慈濟宮碑」）とまとめた。天下の各州県には必ず祠廟があるが、その神祇の威徳は、遠くても一、二州にしか及ばず、一般的に州境を越えない。忠顯英惠侯（保生大帝）は漳州、泉州の境界に居住するが、七十年間、漳州、泉州の以外にも、莆陽（即ち興化軍）、長樂（即ち福州）、建州、南劍州、汀州、潮州、広西、広東にまで及んでいる。要するに、保生大帝は宋代の代表的な「多地域的祠廟信仰」の一つと見なすことができる。

宋代は、まさに「多地域的祠廟信仰」が勃興し、王朝政治、地域社会、民衆の日常生活に影響を与えてゆく時代である。従って、「多地域的祠廟信仰」を通じて、宋代の地域社会の実態、ひいては地域間の関係性を把握することができると考えられる。

二、宋代における祠廟信仰に関する研究の回顧

20 世紀 60、70 年代より、学界では宋代における祠廟信仰に関心を寄せ始め、これまで多くの研究成果が蓄積されている。ここでは蔣竹山、皮慶生、松本浩一らの研究史の整理を参考にしながら、宋代の祠廟信仰に関する研究を整理し、その問題点を提示することとする〔蔣竹山 1997〕〔皮慶生 2008〕〔松本浩一 2010〕。

1、宋代の祠廟信仰に関する研究

概して言えば、これまでの研究は三つの方向で行われている。

第一はケーススタディ、即ち個別の祠廟信仰の源流を遡る方向である。主として明清以降、

「多地域的祠廟信仰」に演変した祠廟信仰、例えば、城隍廟、媽祖、梓潼、五通（五顯）、二郎神、張王、瘟神などが注目され、祠廟信仰の発展過程を遡る成果が見られる。

その代表的なものを挙げる。David Johnson は唐宋時期の城隍神を取り上げ、宋代都市の発展に伴い、城隍神が普遍的に都市の民衆に信仰されるようになったと指摘した〔David Johnson 1985〕。小島毅は地方志を主な史料として、宋代における城隍神の本質、理学家の態度および城隍廟の位置づけについて検討した〔小島毅 1990〕。李献璋は『媽祖信仰の研究』において媽祖の伝説、歴代の封賜、媽祖信仰の伝播などの問題を検討した際に、宋代における媽祖信仰の起源と発展を論じた〔李献璋 1979〕。Valerie Hansen は商人の活動によって天妃信仰が水路に沿って福建から、杭州、鎮江まで広がっていったと論じた〔Valerie Hansen 1999〕。徐曉望と許更生も宋代における媽祖信仰の起源と発展を考察した〔徐曉望 2007〕〔許更生 2014〕。梓潼神について、森田憲司が文昌帝君の地方神から全国的な科挙神となる過程を検討した〔森田憲司 1984〕。Terry F. Kleeman は蛇神から道教の司禄星君、文昌帝君となる過程を整理して道士の果たした役割を強調し、文昌帝君に対する祭祀儀式、經典の形成を論じた〔Terry F. Kleeman 1993〕〔Terry F. Kleeman 1994〕。斯波義信、Richard Von Glahn は五通（五顯）神の演変と江南商業発展の関係を論じた〔斯波義信 1988〕〔Richard Von Glahn 1991〕。皮慶生は五代から宋元代にかけて広徳軍の張王信仰の演変を考察し、張王の形象、靈驗事跡、伝播路線などの問題を分析した〔皮慶生 2008（第2章）〕。

水神、海神信仰に対する研究も少なくない。古林森廣は長江流域における三水府神の性格、位置づけ、信仰の実態について検討し、元来、国家祭祀であった東海神廟、南海神廟、および天妃廟を併せて考察した〔古林森廣 1995（第1部第4、5章）〕。森田健太郎は広州との関わりの深い南海神廟について考察し、広南地域の独自性を検討した〔森田健太郎 2003〕。王元林は南海神廟の歴代の発展を整理し、さらに沿海地域の諸海神と国家祭祀、地域社会との関わりを論じた〔王元林 2006〕〔王元林 2016〕。

第二は祠廟信仰と国家の関係をめぐって、祠廟に対する封賜制度、正祠と淫祠の認定、祠廟信仰が地域社会に与える影響等の問題を考察する方向である。

宋代においては民間で祠廟信仰が盛んとなる現象に対して、朝廷は祠廟信仰へ廟額、封号を与える勅賜制度を設けた。松本浩一は北宋中期から民間に祠廟が大量に立てられるようになると、国家はこれらの祠廟に廟額あるいは封号を授けることを通じて、新興の民間信仰を国家祭祀体系の枠の中に取り入れてコントロールすることを行うようになってゆくと論じた〔松本浩一 1986〕。Valerie Hansen によると、南宋時期に庶民出身の祀神が激増し、国家が廟額と封号を勅封することも頻繁となった。在地エリートが当地の祠廟のために朝廷に廟額や封号を申請し、「転運使」が朝廷に命じられて祀神の靈驗事跡を確認する。その過程において、地方官と在地エリートは共同利益の下に協力していった〔Valerie Hansen 1999〕。金井徳幸は南宋時期に祠廟が激増する背景として、国家祭祀である社稷祭祀が衰微し、鬼神信仰が民間に浸透

していると指摘した。さらに勅封の審査、認定及び授与過程に「父老」が重要な役割を果たしたと論じた〔金井徳幸 1992〕。その後、須江隆は唐代から五代を経て、宋代において賜額や賜号制度が形成されてゆくこと、さらにその変遷過程並びに宋朝の意図を論じた〔須江隆 1994〕。小林隆道は宋代勅賜文書の「勅牒」とその刻石文書に注目し、勅牒とその刻石文書の構成には時期的傾向が存在しており、徽宗朝に賜額申請制度が整備されたこと、勅牒内の「事書」部分に記された発出申請と審査過程の重要度が増したこと、その勅牒文書を高精度に復元する刻石文書が現れることを明らかにした〔小林隆道 2013〕。

朝廷、地方官府は管轄内の祠廟信仰を祀典に記載している。祀典に載っているかどうかによって祠廟は「正祠」、「淫祠」に分けられる。小島毅は福建興化府、泉州府の地方志を史料とし、宋元明清時代の勅賜についての記載によって官方の民間祠廟に対する態度を分析し、明代嘉靖以降、地方志では淫祠への定義が厳しくなる傾向があったと指摘した〔小島毅 1991a〕。一方、皮慶生の研究によれば、宋代においては正祠と淫祠とは絶対的に対立する存在ではなく、祀典に載ってはいないが、「淫祠」として取り締まられていない祠廟があることを明らかにした〔皮慶生 2005〕。楊俊峰は宋代の祠廟に対する封賜と祀典を論じた〔楊俊峰 2019〕。王忠敬は地方志に載っている祠廟が勅封されたことにもかかわらず、地方に認められることと、地方官がこれらの祠廟を利用して地方を管理することを論じた〔王忠敬 2017〕。

祠廟信仰が地域社会に与える影響については須江隆、水越知などの研究がある。須江隆は一連の研究を通じて、北宋徽宗時代から南宋期までに大量に作られた祠廟の記録を分析し、北宋末期から南宋時代における政権の中枢にいた科举官僚がもっていた地域秩序認識は廟神の加護による地域社会の安寧であったこと、その時期に神々の力を借りた統治の枠組みが形成されたこと、王朝権力と地域社会をめぐる社会的構造が徐々に変化していったことを明らかにした〔須江隆 2001、2002、2003a、2003b、2004〕。その後、須江隆は南宋時代に先進地帯の典型的な古鎮である南潯鎮の形成期を中心に提起し、碑文記録に基づいて、宋代以降の都市化の進展により発展していた「鎮」社会において、祠廟がその地域結合に果たした役割を検討した〔須江隆 2005〕。また、須江隆は福建莆田県の祥応廟を通じて、当地の方氏一族の戦略と朝廷との関係を考察した〔須江隆 1998〕。水越知は宋代より祠廟は地域社会の政治的・経済的な中核的施設となったと指摘した〔水越知 2002〕。さらに、水越知は江南の市鎮に現れた東嶽廟が諸州県に置かれる求心力のある城隍廟のような役割を果たし、地域社会の中核的信仰となったと論じた〔水越知 2003〕。前村佳幸は浙江烏青鎮を例として、宋代の鎮の生活空間を描き、土地神廟の建造によって結びつく当鎮住民、在野読書人と駐在官のあり方を論じた〔前村佳幸 2001〕。金相範は福州を取り上げて、祠廟に関する政策の変化と地域社会に果たした役割を論じた〔金相範 2011〕。楊宇勛は「富民」が祠廟の勅賜の申請、祠廟の建造と運営、祭祀活動の「会首」の担い手となることや資金の募集に参与することを通して、地方の権力と資源をマスターしようとしていることを明らかにした〔楊宇勛 2013〕。

第三は、祭祀活動の実態、即ち祭祀儀式、組織などの問題を解明する方向である。田仲一成は宋代の祠廟の祭典に関心を向け、演劇集団、祭祀組織、祭典の参加者など祭典の具体的な様相を描き出した〔田仲一成 1981〕。金井徳幸は宋代福建における祭祀活動と郷約の関連を提示した〔金井徳幸 1988〕。皮慶生は宋代人の生活に重要な「祠賽社会」をめぐって、その社会機能、組織形式、官方の態度を分析し、「会首」、「社首」、「社」、「会」の違いを明らかにした〔皮慶生 2008（第3章）〕。易素梅は二仙信仰に関する廟記を通じて、晋豫の交界の郷村の女性が積極的に祠廟の建造を唱え、資金を募り、材料を準備し、祠廟の運営に参加している様子を明らかにした〔易素梅 2017〕。

2、宋代の多地域的祠廟信仰に関する研究

最後に、宋代における多地域的祠廟信仰に関して系統的に検討した成果をまとめておく。

Valerie Hansen は、南宋に入り、商業革命によって人の移動が頻繁になってから多地域的祠廟信仰が起ころし始めるという考えを踏まえ、五通神、張王、天妃、梓潼を取り上げてその伝播状況を概述し、新祠廟が水路によって商業の発達した都市に分布していることや、その伝播の担い手が商人であることを論じた〔Valerie Hansen 1999〕。商業の発達と水路が祠廟信仰の伝播と関連を有していたことは示唆に富むが、商業の発展と商人の役割を強調しすぎて、士人とほかの民衆との役割を考慮に入れていないこと、宋代における張王、天妃の祠廟の分布と伝播範囲についての整理が不十分であるなどの問題は無視できない。

皮慶生は Valerie Hansen の考えを批判しながら、マスコミ学の伝播理論を参考にして祠廟信仰の伝播について検討を加えた。祠廟信仰の伝播は信仰者が言語、香火、祀神の塑像などの媒介を通じて、本地域からほかの地域の民衆へ伝播する形で実現する。伝播者と発生地の関係には四つのパターンがある。即ち、発生の地の信仰者が他の地方に行って祠廟を立てるパターン、外来の民衆が発生地に来て信仰者となり、地元に戻って祠廟を立てるパターン、外来の民衆が発生地に来て信仰者となり、地元以外の地方に祠廟を立てるパターン、外来の信仰者が祖廟を巡礼し、地元に戻って祠廟を立てるパターンという四つの伝播パターンである。新しく建てられた祠廟は新たな伝播元になり、以上の四つの伝播パターンを経てさらに広がることもある。伝播の担い手としては地方官、商人のほか、在地の士人、僧侶や道士、朝廷と地方官府、軍人、水夫などの流動性の高い人々に目が向けられている。さらに北宋、南宋の間に、大量の北方人が南方に遷移した。それに伴い、北方人は地元の祠廟信仰を南方に移転した。最後に五顯、仰山、梓潼、天妃の伝播範囲についても論じている〔皮慶生 2008（第5章）〕。皮慶生の研究では多地域的祠廟信仰の伝播に関する伝播の媒介、伝播の方式、伝播の担い手、祖廟と分廟との関係などの問題点が提示されており、示唆に富む。しかし、五顯、仰山、梓潼、天妃の伝播範囲を分析する際には、宋代における実態、祠廟の分布などについて更なる検討の余地があると考えられる。

3、これまでの研究の問題点

以上、これまでの宋代における祠廟信仰の研究を概述した。総じていえば、祠廟信仰と国家や社会の関係をめぐる点に議論が集中しており、特に祠廟信仰を通じて国家と地域社会の連結に目が向けられている。各ケーススタディのうちでは、明清以降流行している祠廟信仰に関心が集まり、その源流を宋代まで遡ることにとどまり、宋代についての検討が不十分なため、宋代の独自性が見出せていない。祠廟信仰は地域社会において政治的な役割が存在したことが認識されるようになってきたが、祠廟信仰と地域経済との関連などの問題が残されている。多地域的祠廟信仰については、商業の発達、水路交通、商人、士人などの移動によって、祠廟信仰が多地域で信仰されるようになったことが明らかにされた。しかし、宋代における信仰の実態、複数の多地域的祠廟信仰を併せて視野に入れ、地域社会との関わりを論ずるなどの問題について議論の余地が残されている。

宋代に比べて、明清時代の祠廟信仰に関する史料ははるかに多いため、体系的な地域社会の祠廟信仰研究が提出されている。例えば、濱島敦俊は、元代後半から清代末期までの江南デルタにおける土神の総管信仰の変遷、江南農村社会の商業化、都市化との関連について実証的な研究を行った〔濱島敦俊 2001〕。朱海濱は近世の浙江地域における関羽、周雄、胡則信仰のケーススタディを行い、浙江地域を三つの区域に分けて祠廟信仰の区域的な差異について検討を加えた〔朱海濱 2008〕。王健は民間神祇の分類、日常生活の中での信仰活動、土地廟の廟界、宗族と民間信仰との関係、周孝子、楊老爺信仰の個別研究などの問題によって明清時期の江南の蘇州、松江地域における民間信仰状況を考察した〔王健 2010〕。彼らの研究から示唆されるように、宋代の祠廟信仰研究においても、ある特定の地域を取り上げ、複数の祠廟信仰を併せて検討する総合的な研究の方向が求められる。

三、今後への展望

以下、福建地域を事例に取り上げ、宋代の祠廟信仰研究の新たな可能性を提示することとする。

1、福建地域を取り上げ、総合的な研究を行う意義

宋代史の史料は政治事件や政治制度に詳細な記述が残されているため、政治史や制度史が真っ先に研究され、「地域社会史」に目を向ける研究が比較的少ない。国家や首都ではなく、基層社会に目を向け、宋朝内の「地域偏差」に注意しながら歴史を見ることが「地域社会史」研究の意義である。岡元司の整理によれば、これまでの宋代の地域社会史の研究は主に地域経済史、水利・開発史、在地エリート生活史に着目している。地域別に言うと、華中、華北、華南を論じる研究もあるが、両浙路、江南東路、江南西路に関する成果が比較的が多い。福建地域につ

いては、科学史、思想史の研究が盛んとなってきており、その中では特に興化軍莆田県についての事例研究が進んでいる〔岡元司 2010〕。従って、祠廟信仰の方向から宋代の福建地域社会史を検討する余地がある。

福建地域は中国東南沿海地域に位置しており、古くから「閩文化」という独自の文化を形成している。福建中部の東西に走る鷺峰山、戴雲山、博平嶺という山脈線を境界として、福建地域は内陸区域と沿海区域に分かれる。その間に区域性の差異が存在している。地理的には、内陸区域が山脈に取り囲まれて河谷盆地が散在しているに対して、沿海区域は山脈を背にして海に臨む平原である。内陸区域と沿海区域の間には地理的な差異が存在しているだけではなく、地理的環境の影響による経済的・文化的な差異も見落とすわけにはいかない。内陸区域が鉱物と山林資源が豊富であるに対して、沿海区域は塩業、陶磁業、手工業が盛んである。文化面で科挙、教育、道学、宗教などの状況も内陸区域と沿海区域の間で異なっている〔林拓 2004〕〔呉修安 2009〕〔陳衍徳 1989〕〔呉松弟 1988〕〔林汀水 1992〕〔Billy K. L. So 2000〕。

祠廟信仰についてみれば、唐五代において内陸と沿海とではすでに祠廟の数量、祀神の来源、祀神の類型が異なっており、同様に、明清時期にも祀神の類型、祀神の影響範囲、祀神体系などの方面で、沿海と内陸間の区域的差異が見られると指摘されている〔林拓 2007〕。今まで宋代の祠廟信仰は詳細に論じられてこなかったが、唐五代および明清時期と同様な区域的差異が存在することが考えられる。加えて、明清以降の祠廟信仰研究では、ある地域に存在する祠廟信仰が全面的に論じられており、地域内で信仰されるあらゆる祠廟信仰が対象となっている。ただし、本地域に起源した多地域的祠廟信仰がほかの地域に広がる伝播状況については、あまり関心が寄せられていない。林拓、范正義は宗教学、文化地理学の立場から、宋代から明清時期までの福建地域の多地域的祠廟信仰の起源地の転換、信仰の伝播原理を模索してきたが、宋代の実態についての論証が不十分であり、再検討する必要がある〔林拓 2006〕〔范正義 2010〕。

つまり、宋代の福建地域を取り上げて、多地域的祠廟信仰の実態を明らかにするうえで、福建地域社会内の区域的差異、多地域的祠廟信仰の起源と伝播の原理などの問題点に取り組むことが求められる。

2、史料の可能性

明清時代に比べて、宋代の祠廟信仰に関する史料の絶対量は不足しており、研究の方向と精度が制約される。それ故、利用できる史料をできる限り発掘することが最も重要な課題である。

多地域的祠廟信仰にとって、特に明清以降、祀神の生前事跡、靈驗事跡、祠廟の施設、祭祀儀式、士人の題跋・詩聯・祝文を収集した編纂物が出された。例えば、宋代でも張王信仰について『祠山事要指掌集』が編纂された。清代の楊浚は天上聖母（媽祖）、広沢尊王、保生大帝、清水祖師の事跡を『四神志略』にまとめた。『（民国）安溪清水岩志』は清水祖師の祖廟である清水岩をめぐる清水祖師信仰の発展過程に関わる史料を整理したものである。これらの編纂

物は宋代の情報も入っているが、後世に偽造されたものもあり、直接的に事実として利用することができない。勿論、明清時期の編纂物や、族譜には貴重な宋代の史料、例えば勅牒、廟記を収録するものもある。ただし、これらは慎重に史料批判を加えてから利用しなければならない。

ほかに宋代で残されている関連史料として、勅牒、廟記、祝文、地方志などが挙げられる。

まずは勅牒である。前節で整理したとおり、宋代において、朝廷は祠廟信仰に対して「廟額」、「封号」の勅賜制度を整えている。祠廟は勅賜される際に、「勅牒」を受け、石碑に「勅牒」文書を刻み、復元することがよく見かけられる。例えば、現存する南海神廟勅牒三碑である（広州南海神廟内に二基の原碑と北京大学図書館所蔵の三基の拓本）〔小林隆道 2013（第2部第2章）〕。一般的に、勅牒には地方からの勅賜の申請から尚書省の勅賜の下達までの経緯を記録している。その中でも、祠廟と祀神の基本情報、靈驗事跡、勅賜の申請と靈驗事跡の確認に参加している地方官、信仰者などの情報が提示される。要するに、勅牒とその勅牒を記録した石刻資料を利用すれば、勅賜制度、文書の伝達過程を明らかにするのみならず、祠廟信仰の実態を窺うこともできる。

次は廟記である。廟記は祠廟を建造したり重修したり移転する際に、地元出身の士人や官員に執筆を依頼し、工事の経緯を記録したものである。廟記は石碑に刻んで廟内に建てることが多いので、宋代人の文集に収録されるほか、碑刻資料にも残されている。宋代士人によって執筆された廟記からは建造の参与者、靈驗事跡、祀神の基本情報、伝播範囲、祠廟の構造、信仰活動、士人の態度など多様な情報が得られ、祠廟信仰の宋代における実態を解明することができる。

三つ目に祝文である。広義には「祝文」はすべての神霊や神仏や神仙に対して祈りを捧げる際に書かれた文章を指す。その内、道教式の醮儀で天帝に捧げるものが「青詞」となり、仏教式の祭祀で神仏に捧げるものは「疏」となる。これに対して、祠廟に祈禱を行い、祀神に捧げるものは狭義での「祝文」である。梅村尚樹は宋代における地方官の着任儀礼を検討する際に、北宋から南宋にわたっての地方官の「謁廟」祝文の変容を論じた〔梅村尚樹 2018（第3章）〕。小島毅は『西山文集』に収録されている祝文を使って、真徳秀が地方官として「謁廟・辞廟」、「春祈・秋報」、「告事・捕盜・祈風・禳蝗」、「祈雨・祈晴」を目的として管轄境内の祠廟に祈禱していた様子を明らかにした〔小島毅 1991b〕。即ち、地方官は赴任や離任の際に孔子廟、諸廟に「謁廟」するだけではなく、天候不順、疫病流行、海寇横行などの場合、祠廟に祈禱を行い、祝文を残している。そのほか、私的な目的、例えば家内安全、家族健康への祈願で祝文を書くこともある。一般的に、祝文は祈禱の目的と神への褒美を述べる短いものであり、決まった形式も多いが、執筆者の身分、祈禱の目的、祈りの対象となる祠廟などの情報について分析すれば、祠廟信仰の地域社会における機能、地方官の祠廟への態度等が見えてくる。

最後に地方志である。前述のとおり、宋代以降の地方志には「祠廟」、「祠祀」の部類があり、

当地に影響のある祠廟を記録している。そのほか、「輿地志」の山川部には山にある祠廟を紹介し、「人物志」の仙釈部には神格化された僧侶、道士、一般民衆の事跡を述べている。一般的に言うと、地方志での祠廟信仰に関する記録は、単なる祠廟の所在、始建時期や、祀神の基本情報にとどまるが、詳細に祠廟の建造経緯、祀神の生前事跡、靈驗事跡を紹介し、各時代の廟記、祝文の原文を収録することもある。それに加えて、地方志は州府、県の全面的な状況を記録するものであり、祠廟信仰の地域社会における位置づけが窺える。明清時代の地方志に残される、祠廟の所在、始建時期の記載は宋代における多地域的祠廟信仰の祠廟の分布を整理する重要な史料となる。

以上、勅牒、廟記、祝文、地方志の性格と祠廟信仰研究における可能性を紹介した。ただ、一言加えるならば、これらの史料を利用する際には、他の複数の史料と対照させることが不可欠である。具体的には同時代の正史、筆記小説（例えば『夷堅志』）を参照しながら伝説と歴史的事実を分別し、祠廟信仰の実態を明らかにすべきである。

3、ケーススタディとして清水祖師、保生大帝、媽祖信仰

明清時期の福建地域において、多地域的祠廟信仰の勃興が注目される。莆田県の媽祖、福州の臨水夫人、漳州の保生大帝（大道公）、泉州の清水祖師、汀州の定光古仏、安溪県の広沢尊王（郭聖王）、漳州の開漳聖王（陳元光）などの祠廟信仰は、発生地を越えて他の地域へ広がり、さらに福建の移民によって台湾、マカオ、香港、さらに日本、マレーシア、シンガポールに波及してゆく〔徐曉望 1993〕。

その内、広沢尊王、開漳聖王は唐末五代に形成され、宋代に入ってより発展してきたが、まだ多地域的祠廟信仰には拡大していない。臨水夫人は宋代にはすでに多地域に信仰されているが、五代に形成されたものである。定光古仏信仰は北宋初期に形成されたが、本地域に止まっている。宋代において形成され、多地域的祠廟信仰となってゆくのは媽祖、保生大帝、清水祖師である。

媽祖は宋初の莆田県の女巫、清水祖師は北宋中期の安溪県の僧侶であり、保生大帝は北宋の漳州、泉州の界にある同安県（あるいは龍溪県）の医者である。三者は福建に生まれ、死後、本地の民衆によって祠廟に祀られて祠廟信仰が形成され始め、北宋後半および南宋になって更なる発展を遂げ、多地域的祠廟信仰に拡大してきた。発生地と信仰の中心地である莆田市、安溪県、龍溪県は福建沿海地域に当たり、閩東（莆仙）と閩南（漳泉）という二つの文化地域に分布している。こうして見ると、媽祖、保生大帝、清水祖師は宋代における福建地域の多地域的祠廟信仰の形成と発展を考察する有益なケーススタディの研究対象となる。さらに、媽祖、保生大帝、清水祖師に関する勅牒、廟記、祝文などの宋代史料は少なくないので、詳しい研究の可能性が考えられる。

次は媽祖、保生大帝、清水祖師のケーススタディとしての問題点と可能性を提示する。

まず、重要な課題となるのが宋代の実態解明である。これまでの媽祖、保生大帝、清水祖師に関する研究は、生涯事跡、信仰の形成及び発展過程についての歴史学的考証とフィールドワークによる個別祠廟の構造、祭祀組織、祭祀活動などについての民俗学的、人類学的な研究という二つの方向より行われている。残存史料の数量などの原因によって、明清以降に関しての考察が多く、信仰の形成初期にあたる宋代についての分析が比較的に不十分であり、明清時期に編纂された文献を用いて宋代の状況を復元してゆくため、宋代の実態への理解に誤謬が生じていることが少なくない。従って、できるだけ同時代の史料と照合し、事実と伝説の違いに注意しながら、祠廟信仰の宋代における発展の実態と全体像を解明することが求められる。既存の史料を利用すれば、祀神の生前事跡、廟額や封号の勅賜の経緯、靈驗事跡、祠廟の建造、祠廟の分布、祭祀儀式などの祠廟信仰の実態が明らかにし得ると考えられる。

次の課題は、祠廟信仰の性格と職能の検討である。現在、保生大帝は主に「医療神」と看做され、媽祖は「海神」としてイメージされている。明清以降、清水祖師、保生大帝、媽祖は共に道教、仏教との繋がりが強くなる。しかし、宋代において、これらの神祇は多様な職能を持ち、人々の日常生活に浸透しており、信仰者の身分に従って神の職能と役割が異なるように見られる。また、宋代において、これらの神祇はまだ道教、仏教との関係が薄い。従って、祠廟信仰を宋代人の信仰体系に位置づけ、祠廟に祀られる神祇の靈驗事跡と職能を再検討し、祠廟信仰の特質を解明することが求められる。

更に、多地域的祠廟信仰について、祠廟分布の特徴と伝播の要因を考える課題も残されている。祠廟信仰がどのように本地域を越えて多地域で信仰を集めるのかは興味深い課題である。祠廟の分布は多地域的祠廟信仰の伝播範囲を反映している。祠廟の所在地を整理して祠廟の空間的分布の特徴、信仰の伝播ルート、伝播の担い手、伝播の形式などの問題を検討し、多地域的祠廟信仰と地域社会との関連性を追究することが求められる。

最後の課題は、ケーススタディを積み重ね、総合的な考察を行うことである。筆者の関心に即して言えば、媽祖、保生大帝、清水祖師信仰のその形成と発展について、その共通点、相違点を分析し、福建地域社会の地理、経済、文化の状況との関連を論じ、明清以降の発展状況に比べて検討し、宋代の多地域的祠廟信仰の特質を抽出してゆくことを考えている。

【参考文献】(時間順)

- 李献璋 1979『媽祖信仰の研究』、泰山文物社。
 田仲一成 1981『中国祭祀演劇研究』第一篇第一章、東京大学出版会。
 森田憲司 1984「文昌帝君の成立：地方神から科举の神へ」、京都大学人文科学研究所編『中国近世の都市と文化』。
 David Johnson. 1985. The City-God Cults of Tang and Sung China, in *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 45:2 (1985), pp. 363-457.
 松本浩一 1986「宋代の賜額。賜號について一主として『宋會要輯稿』にみえる史料から」、野口鐵郎編『中國史における中央政治と地方政治』、昭和六十年年度科研費報告。

- 斯波義信 1988『宋代江南經濟史研究』、汲古書院。
- 金井徳幸 1988「南宋福建の祭祀社会と郷約」、『立正大学東洋史論集』1。
- 呉松弟 1988「宋代福建商品經濟的較大發展及其与地理条件的關係」、『中国社会經濟史研究』1988年第3期。
- 陳衍徳 1989「宋代福建手工業布局的幾個問題」、『中国社会經濟史研究』、1989年第1期。
- 小島毅 1990「城隍制度の確立」、『思想』792。
- Richard Von Glahn. 1991. The Enchantment of Wealth: The God Wutung in the Social History of Jiangnan, in *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 51:2.
- 小島毅 1991a「正祠と淫祠—福建の地方志における記述の論理」、『東洋文化研究所紀要』114。
- 小島毅 1991b「牧民官の祈り—真徳秀の場合—」、『史学雑誌』100(11)。
- 金井徳幸 1992「南宋の祠廟と賜額について—釈文向と劉克莊の視点」、宋代史研究会編『宋代の知識人—思想・制度・地域社会』、汲古書院。
- 林汀水 1992「兩宋期間福建の鋤冶業」、『中国社会經濟史』、1992年第1期。
- 徐曉望 1993『福建民間信仰源流』、福建教育出版社。
- Terry F. Kleeman. 1993. The Expansion of the Wenchang Cult, in *Religion and Society in T'ang and Sung in China*, edited by Patricia Buckley Ebrey, Peter N. Gregory.
- Terry F. Kleeman. 1994. *A God's Own Tale: The Book of Transformations of Wenchang, the Divine Lord of Zitong*, State University of New York Press.
- 須江隆 1994「唐宋期における祠廟の廟額・封號の下賜について」、中國社會文化學會編『中國—社会と文化』9。
- 古林森廣 1995『中国宋代の社会と經濟』第一部四章「宋代の長江流域における水神信仰」、第五章「宋代の海神廟に関する一考察」、国書刊行会。
- 蔣竹山 1997「宋至清代の国家与祠神信仰研究的回顧与討論」、『新史学』第8卷第2期。
- 顏章炮 1998「晚唐至宋福建地区的造神高潮」、『世界宗教研究』1998年第3期。
- 須江隆 1998「福建莆田の方氏と祥応廟」、宋代史研究会研究報告第6集『宋代社会のネットワーク』、汲古書院。
- 韓森 (Valerie Hansen) 1999 包偉民訳『變遷之神：南宋時期的民間信仰』、浙江人民出版社。
- Billy K. L. So (蘇基朗) 2000. *Prosperity, Region, and Institutions in Maritime China: The South Fukien Pattern, 946-1368*, Harvard Univ Asia Center.
- 須江隆 2001「祠廟の記録が語る「地域」観」、宋代史研究会編『宋代人の認識—相互性と日常空間』(宋代史研究会研究報告第7集)、汲古書院。
- 濱島敦俊 2001『總管信仰：近世江南農村社会と民間信仰』、研文出版。
- 前村佳幸 2001「烏青鎮の内部構造—宋代江南市鎮社会分析」、『宋代人の認識—相互性と日常空間』(宋代史研究会研究報告第7集)。
- 須江隆 2002「作為された碑文—南宋末期に刻まれたとされる二つの祠廟の記録—」、『史学研究』236。
- 水越知 2002「宋代社会と祠廟信仰の展開—地域核としての祠廟の出現」、『東洋史研究』60(4)。
- 須江隆 2003a「唐宋期における社会構造の変質過程—祠廟制の推移を中心として—」、『東北大学東洋史論集』9。
- 須江隆 2003b「祠廟と宗族—北宋末期以降の「地域社会」の形成と再編—」、『中国史上的宗族與社会』(中国史学会第四回國際學術大会論文集)。
- 水越知 2003「宋元時代の東嶽廟—地域社会の中核的信仰として—」、『史林』86(5)。
- 森田健太郎 2003「宋朝四海信仰の実像—祠廟政策を通して—」、『早稲田大学大学院文化研究科紀要』49(4)。
- 須江隆 2004「徽宗時代の再検討—祠廟の記録が語る社会構造」、『人間科学研究』創刊号。
- 林拓 2004『文化的地理過程分析—福建文化的地域性考察』、上海書店出版社。
- 皮慶生 2005「宋人的正祠、淫祠観」、『東岳論叢』2005年第4期。
- 須江隆 2005「祠廟の記録に見える近世中国の「鎮」社会—南宋期の南潯鎮の事例を中心に—」、『都市文化研究』5。

- 徐曉望 2007『媽祖信仰史研究』、海風出版社。
- 王元林 2006『国家祭祀与海上絲路遺跡—広州南海神廟研究』、中華書局。
- 林拓 2006「辺縁—核心転換：区域神明信仰策源地の形成及特徴—以福建為例—」、『宗教』2006年02期。
- 林拓 2007「地域社会変遷与民間信仰区域化の分異形態—以近八〇〇年来福建民間信仰為中心—」、『宗教学研究』2007年第3期。
- 朱海濱 2008『祭祀政策与民間信仰變遷：近世浙江民間信仰研究』、復旦大学出版社。
- 皮慶生 2008『宋代民衆祠神信仰研究』、上海古籍出版社。
- 李凱 2008『『祭不越望』探析』、『雲南社会科学』2008年第4期。
- 復旦大学文史研究院編 2009『「民間」何在、誰之「信仰」』、中華書局。
- 吳修安 2009『福建早期發展之研究—沿海与内陸的地域差異』、稻鄉出版社。
- 范正義 2010「福建民間信仰的文化地理学考察」、『閩台文化交流』総第21期。
- 王健 2010『利害相関：明清以来江南蘇松地区民間信仰研究』、上海人民出版社。
- 岡元司 2010「地域史」部分、遠藤隆俊、平田茂樹、浅見洋二編『日本宋史研究の現状と課題—1980年代以降を中心に—』、汲古書院。
- 松本浩一 2010「仏教道教史研究」部分、遠藤隆俊、平田茂樹、浅見洋二編『日本宋史研究の現状と課題—1980年代以降を中心に—』、汲古書院。
- 須江隆 2010「地方志・石刻研究」部分、遠藤隆俊、平田茂樹、浅見洋二編『日本宋史研究の現状と課題—1980年代以降を中心に—』、汲古書院。
- 劉大可 2011『伝統与変遷：福建民衆の信仰世界』、社会科学文献出版社。
- 金相範 2011「宋代祠廟政策的变化与地域社会—以福州地域社会為中心—」、『台灣師大歷史學報』第46期。
- 小林隆道 2013『宋代中国の統治と文書』第二部第二章「宋代賜額勅牒と刻石—石刻「文書」の原文書復元への指向性—」、汲古書院。
- 楊宇助 2013「試論南宋富民参与祠廟活動」、『淡江史学』25。
- 許更生 2014『媽祖研覃考辯』、西安出版社。
- 王元林 2016『国家正祀与地方民間信仰互動研究』、中国社会科学出版社。
- 易素梅 2017「家事与廟事—一九至十四世紀二仙信仰中的女性活動—」、『歷史研究』2017年第5期。
- 王忠敬 2017「南宋地方志与地方官的祠祀活動—以『祠廟門』為中心的考察—」、『宋史研究論叢』。
- 梅村尚樹 2018『宋代の学校：祭祀空間の変容と地域意識』第三章「地方官の着任儀礼」、山川出版社。
- 楊俊峰 2019『唐宋之間的国家与祠祀—以国家和南方祀神之風互動為焦點』附錄二「宋代的封賜与祀典—兼論宋廷的祠祀措施」、上海古籍出版社。

Research Review and Issues on the Temple Worship during the Song Dynasty

WANG Yanping

Through the previous research on the folk belief of the Song Dynasty, a lot of terms such as “local belief”, “popular religion”, “diffused religion”, “temple worship”, “people’s temple worship”, have been mixedly used. After analyzing the definition of “people’s temple worship” and the recognition system of the Song People, it turns out to be more proper to apply the term “temple worship”. Generally, a “temple worship” is restricted among the original area. Nevertheless, during the Song Dynasty more and more temple worships have achieved the expansion crossing over the original area and became multiregional temple worships.

The research on this subject is conducted on three respects, including (1) individual case studies, mostly on the multiregional temple worships of Ming and Qing Dynasty for tracing back the originality to Song Dynasty; (2) the relation between the temple worship and the imperial, through the research on the title grant system of temple worship, the distinction between Zhengci (正祠) and Yinci (淫祠) and the role in local society playing by the temple worships; (3) the real conditions of ritual activities, like the ritual ceremony and organization. In addition, the research about the multiregional temple worship is advanced in considering the medium, the method, the infector of the propagation and the relationship between the original temple and the branch temples.

As future issue, it is necessary to firstly consider the property and possibility of the historical materials, such as Chidie (勅牒), Miaoji (廟記), Zhuwen (祝文), local topography (地方志), and then to study on cases of the multiregional temple worship, taking Qingshuizushi (清水祖師), Baoshengdadi (保生大帝), Mazu (媽祖) for instance, finally to make an integrated analysis of the multiregional temple worship among Fujian Area.

Keywords: Multiregional Temple Worship, Historical Materials, Case Study, Fujian Area